



公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な
内容

- 1、4面 朝日がん大賞
2、3面 日本対がん協会賞
8面 リレー・フォー・ライフ・ジャパン
福岡開催

朝日がん大賞は 大橋靖雄氏

データマネジメントで 「科学的根拠に基づく」がん対策に貢献

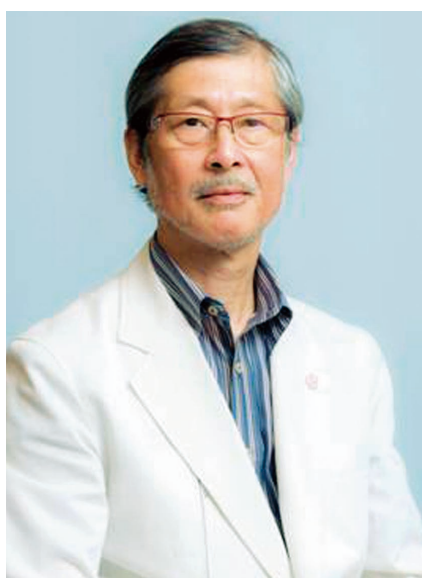
日本対がん協会賞は愛知県がんセンターなど4氏1団体

今年度の朝日がん大賞が、大橋靖雄・中央大学理工学部教授(60)=生物統計学=に贈られることが決まった。公益財団法人日本対がん協会(垣添忠生会長)が9月1日付で発表した。日本対がん協会賞の2部門(個人・団体)は4氏1団体に贈られる。受賞者は同5日に福岡市で開催される「がん征圧全国大会」で表彰される。(4面に大橋氏、2、3面に協会賞受賞者の紹介)

大橋氏は、科学的に計画された臨床試験の重要性を早くから訴え、試験の質を支える独立した統計センターの設置とデータマネジメントを実践。がん医療に関する多くの臨床試験にかかわった。

がん検診の分野でも、我が国初の大規模無作為化比較試験であるJ-STARTなどで、統計・データ管理責任者として貢献。科学的根拠に基づくがん対策の推進に大きく貢献してきたことが評価された。

一方で、日本対がん協会賞の個人の部に決まったのは、新潟県立がんセンター新潟病院参与の小越和栄氏(79)、元京都府医師会消化器がん検診委員会



委員長郡大裕氏(77)、山形県酒田市のほんま内科胃腸科医院院長の本間清和氏(66)、元宮城県医師会長の安田恒人氏(85)の4氏。

小越氏は、新潟県地域がん登録設立にかかわり、同県のがん予防対策に貢献。郡氏は消化器がん検診の精度管理向上に尽力した。本間氏は、地域のがん検診受診率向上を図り、安田氏は、宮城県内のがん検診基盤を固めるなど、皆さん、長年にわたって地域のが

ん対策に貢献してきたことが評価された。

団体の部は、愛知県がんセンター(木下平総長)に決まった。県立としては初めて、病院と研究所を併せ持つがん専門施設として1964年に設立された。同センターは、がん医療への貢献はもとより、その特色をいかし、疫学・公衆衛生の研究でも実績をあげてきたことが評価された。

日本対がん協会賞は、長年がん征圧活動に取り組み、功績を挙げた個人・団体を顕彰するもので今年度が47回目。朝日がん大賞はその特別賞として朝日新聞社の協力を得て創設され、今年で14回目。

選考委員は次の通り。垣添忠生・日本対がん協会会長(委員長)、武藤徹一郎・がん研有明病院名誉院長・メディカルディレクター(副委員長)、大内憲明・東北大学大学院医学系研究科長・医学部長、津金昌一郎・国立がん研究センターがん予防・検診研究センター長、横倉義武・日本医師会長、桑山朗人・朝日新聞科学医療部長、秋山歌太郎・日本対がん協会理事長。

がん相談ホットライン 祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

日本対がん協会賞 検診の精度管理や受診率の向上にがん登録 がん予防の基礎確立に多大な貢献 4氏1団体が受賞

がん征圧活動に長年携わり、多くの業績を残した方々を顕彰する日本対がん協会賞。今年度は個人の部で4氏、団体の部で1団体にそれぞれ決まった。みなさんの業績を紹介する。

日本対がん協会賞 個人の部

小越 和栄氏(おごし・かずえい)79歳
新潟県立がんセンター新潟病院参与



1967年から新潟県立がんセンター新潟病院に勤務し、退職するまでの35年間、がん診療に従事。消化器がんの内視鏡診断の指導にあたってきた。とくに逆行性膵胆管造影(ERCP)の開発と普及に努めた。膵臓がんは近年、死亡者が増えているがんの一つ。早期診断の技術開発が求められている中で、小越さんの活動は特筆される。

がん医療の基盤として大きな期待が寄せられるがん登録についても県と一緒に

準備に携わり、91年に同県地域がん登録室を同センター内に設置。初代の室長としてその重要性を関係者に訴え、同県におけるがん登録の基礎を確立させるとともに、そのデータの有効活用にも尽力した。

胃がんの内視鏡検診にも早くから取り組み、離島(粟島)においてX線による検診が可能になる2003年まで、内視鏡検診を進めた。その成果を基に新潟市で内視鏡検査による胃がん検診を実施。自身が確立したがん登録との照合・精度管理に取り組み、内視鏡検査による胃がんの住民検診では初めて有効性を示すなど、新潟県のがん予防対策に貢献した。

郡 大裕氏(こおり・よしひろ)77歳

元京都府医師会消化器がん検診委員会委員長



京都府立医大を卒業後は消化器内科医として早くから慢性胃炎の病理・病態の研究に従事し、ヘリコバクター・ピロリ(ピロリ菌)研究の第一線で活動。胃の内部でのピロリ菌の分布を色

素で染めたり、内視鏡検査によるピロリ菌感染の診断を研究したりするなど、ピロリ菌の感染経路や病原性、感染の診断と治療などに関して多くの論文を発表してきた。

2002年に開業した後は、研究の成果を日ごろの診療にいかすとともに、京都消化器医学会の副会長、会長として消化器疾患の診断技術の向上に尽くした。

2003年に京都府医師会胃がん検診委員会(04年か

ら消化器がん検診委員会)委員長就任後は、胃がんや大腸がん検診の精度管理や受診率の向上を図った。

胃がん検診では、2次検診の精度管理に関する統一審査基準を委員会にて定め、基準を満たした医療機関に委託するシステムに変更。研修会を重ねて精度管理向上に寄与した。

大腸がん検診でも、検体の未提出者に対して電話で受診勧奨をするなど、受診率向上を目指してきた。

本間 清和氏(ほんま・きよかず)66歳
ほんま内科胃腸科医院院長(山形県酒田市)



酒田市立酒田病院などを経て1985年に開業した後も、やまがた健康推進機構庄内検診センター長を務めた。同センターにデジタル撮影装置を導入し、読影を「持ち回り」から「集中」に切り替え、要精密検査率、偽陽性率を下げることに力を入れるなど、がん検診の精度管理などに尽力した。

数ある功績の中でも特筆されるのは、酒田地区の受診率向上に工夫を凝らしたことだ。

注目したのは検診の申し込み方法。医師会とともに検証した結果、電話による申し込みの問題があると判断。2006年に申込用紙を全戸に配布して返送してもらう方法に改めた。その結果、それまで20%だった受診率が35%に向上した。

「働く世代」のがん対策も様々に検討。同市と地区医師会が連携し、40～74歳の節目年齢に、「胃がんと大腸がん」の検診無料クーポン券を導入したほか、職場でがん検診の受診機会がない従業員を主な対象に、土日を利用したモデル事業を展開。受診率向上に大きく貢献するとともに、受診者目線の検診機会の提供として関心を集めた。

安田 恒人氏(やすだ・つねと)85歳 元宮城県医師会長



1994年に宮城県医師会長に就任すると同時に、同県対がん協会副会長、同県地域医療協議会会長に就き、都市医師会・市町村・宮城県対がん協会の三位一体のがん検診体系基盤を固めた。なかでも検診受診率を全国トップクラスに押し上げ、地域医療としてのがん集団検診の位置づけを確立した。

精密検査の対象者を地元医療機関に受け入れても、精密検査結果の情報

を対がん協会に集約する仕組みに賛同。精度管理の向上に欠かせない精密検査受診率の正確な把握に努めた。

がん登録における貢献も大きい。宮城県のがん登録は、東北大学医学部公衆衛生学講座の故瀬木三雄教授が全国に先駆けて1959年に開始。その精度の高さは国際的にも評価が高い。

そのがん登録制度について、安田さんは宮城県新生物レジストリー委員会会長として活躍。地域の医療機関とのパイプを広げ、がんの罹患や転帰などの基礎的なデータを、県内の主要病院から収集する採録システムを確たるものにした。

日本対がん協会賞 団体の部

愛知県がんセンター

(木下平=きのした・たいら=総長)

県立としては初めて病院と研究所を併せ持つがん専門施設として1964年12月に設立され、今年、50周年を迎える。その特色をいかし、たばこや飲酒、生活習慣など疫学・公衆衛生の研究で数々の実績をあげ、全国に最新のがん予防情報を発信してきた。その活動ぶりは、自治体立のがん専門施設として特筆に値する。

がん専門病院としてもその活動は注目される。愛知県内20カ所の地域がん診療連携拠点病院との連携を



進め、地域内のどこでも適正ながん医療が受けられる体制を整え、地域がん医療の向上を牽引している。

安全で有効な治療法開発に向けた研究にも積極的に、多くの臨床試験(治験)に取り組んでいる。

日本対がん協会グループ支部永年勤続表彰

今年度の日本対がん協会グループ支部の永年勤続表彰者は25支部の72人。がん征圧に向けた長年の労をねぎらい表彰する。表彰者

を代表して荒木祐美子さん(福岡県支部)に9月5日のがん征圧全国大会で表彰状を贈る。

永年勤続表彰の対象は次のみなさん(敬称略)。

- 北海道支部(北海道対がん協会) = 佐々木隆之▽水野綾子
- 青森県支部(青森県総合健診センター) = 阿保孝方▽杉田圭人▽中村貴司▽村田和人▽山上智恵子▽横山博幸
- 岩手県支部(岩手県対がん協会) = 荒屋敷真
- 宮城県支部(宮城県対がん協会) = 渋谷大助▽堀江記子
- 秋田県支部(秋田県総合保健事業団) = 田澤美春▽渡邊智子
- 山形県支部(やまがた健康推進機構) = 赤城利彦▽浅野寛三▽伊藤久美子▽叶野薫▽軽部恵子▽高橋智恵▽高橋陽子▽土屋修平▽中川薫▽三浦由起▽三澤敏信▽横尾義成
- 茨城県支部(茨城県総合健診協会) = 飯塚いずみ▽高丸知子
- 栃木県支部(栃木県保健衛生事業団) = 神尾恵子▽齋藤英治▽手塚真史▽中野愛子
- 群馬県支部(群馬県健康づくり財団) = 櫻井幸司▽高橋映▽牟田恵理子
- 千葉県支部(ちば県民保健予防財団) = 石井崇雄▽石井貴之▽加藤佐智代▽木村美香▽榊朋子▽佐竹美幸▽豊田雅子▽渡邊綾子▽渡邊さおり
- 長野県支部(長野県健康管理事業団) = 上原茂夫▽宮

- 下通弘
- 三重県支部(三重県健康管理事業センター) = 四竈明日香
- 滋賀県支部(滋賀県健康づくり財団) = 村田浩二
- 京都府支部(京都予防医学センター) = 阿部圭子
- 兵庫県支部(兵庫県健康財団) = 吉田憲正
- 山口県支部(山口県予防保健協会) = 戎谷圭史▽加川圭一▽倉本省治▽竹村美恵▽時重広樹▽水本雄一郎▽三原直子
- 徳島県支部(とくしま未来健康づくり機構) = 鎌村真子
- 愛媛県支部(愛媛県総合保健協会) = 宇都宮一成▽宮本修治▽由井良雄
- 高知県支部(高知県総合保健協会) = 杉本洋輔
- 福岡県支部(福岡県すこやか健康事業団) = 荒木祐美子▽淵上明彦
- 長崎県支部(長崎県健康事業団) = 三浦直樹▽村尾伸二
- 大分県支部(大分県地域保健支援センター) = 加来弘明
- 宮崎県支部(宮崎県健康づくり協会) = 沼口誠
- 鹿児島県支部(鹿児島県民総合保健センター) = 井出口英明▽山元祐樹
- 沖縄県支部(沖縄県健康づくり財団) = 砂辺茂▽玉城潤一▽福地直樹

朝日がん大賞 日本の臨床試験のデータマネジメントを牽引

乳がん検診の大規模臨床研究J-STARTに 大腸がんや子宮頸がん検診の研究も

大橋靖雄

中央大学理工学部教授



大橋靖雄(おおし やすお) 1954年福島県生まれ。1976年東京大学工学部計数工学科卒業。1990年東京大学医学部教授に就任。2014年より中央大学理工学部教授

統計学や疫学は、最近でこそその大切さが理解されてきたようだが、臨床試験の分野でその大切さをずっと訴えてきたのが大橋教授だ。

臨床試験の結果は国民の健康を大きく左右する。データにばらつきがあってもはいかようにでも結論を導くことができしてしまう。それを許さず、臨床試験の品質を管理するのがデータマネジメントだ。試験の計画や症例報告書の作成、試験データの入力、その確認、解析……それぞれの段階でデータの質をチェックする。

かつて、新薬の臨床試験で、統計学の専門家が「質」を管理する考えはほとんどなかった。がん告知も進まないなか、「いい薬ができましたから」などと患者に呼びかけ、副作用のリスクを含

めた詳しい説明はされなかった。

「1980年代後半ごろ、米臨床癌学会(ASCO)に参加した先生たちが『目をむいた』と言うんです。何かというと、学会で発表される多くが、臨床試験のデータ。それもきちんと研究を行う前から計画されているものだった」

今では日本からの発表も少なくないものの、まだまだ欧米の研究に大きく遅れをとっていた。

治験(新薬の臨床試験)を実施する際のルール(GCP)が整備された90年代、臨床試験の実施計画づくりや統計解析にかかわったのが、乳がんや胃がんなどで抗がん剤の効果をみる一連の臨床試験(N-SAS)だった。

国立がんセンター(現国立がん研究センター)が中心となり、がん治療に関する数々の臨床試験を実施している日本臨床試験グループ(JCOG)のデータセンター作りにも協力。今のがん治療のベースを確立するデータづくりに大きく貢献した。

そして今、がん検診に深くかかわる。まずJ-START。乳がん検診で超音波検査を使うことが有効かどうかを検証する無作為化比較試験で、40代の女性7万人以上が参加した世界でも例のない大規模なもの。日本対がん協会の支部も参加したこの試験の統計解析を担っている。

子宮頸がん検診ではHPV検査併用の有効性を検証する臨床研究のデータ管理を担当。大腸がん検診では内視鏡検査の有効性を検証する研究にもかかわる。

福島高校を卒業して進んだのが東京大学工学部。父親が製パン業を営んでいたため、理科系で経営関係が学べることを考えた。入った統計学の講座の恩師が稲の品種改良で無作為化比較試験などを実施していたこともあり、その道に。東大病院中央医療情報部教授から招かれて統計とデータベースを整備。90年に医学部保健学科・疫学教授に就いた。36歳。戦後の東大医学部教授としては最年少だった。

92年には日本初の生物統計学講座である疫学・生物統計学講座を開設。教室出身者が各地の大学教官に就いているほか、研究機関や民間企業などに研究者を輩出してきた。

日本は予防医学、公衆衛生の分野で欧米に立ち遅れる。「保険医療制度が機能しすぎたのかも知れません。自分で健康を守る努力をする、というより、安く治せるから。『名医』の診察料も変わらない。これまでパブリックヘルスが作れなかった」

東大を退官して中央大に移っても、忙しさは変わらない。講義、ミーティング、データ分析、講演……。9月5日のがん征圧全国大会当日も夕方に岩手県で講演が入る。

その合間をみて、文楽を楽しむ。最近では「女殺油地獄」。近く「フォルスタッフ」の文楽版を見に行こうと思っている。ジャズもクラシックも聴く。とくにオペラ。「なんといってもニーベルングの指輪です」。臨床試験のことを語っていた熱っぽい口調が一転、和んだ。

東日本大震災で甚大な被害を受けた故郷・福島を支援しようと、聖路加看護大(現聖路加国際大)の協力のもと、被災者支援医療活動「きぼうときずな」を開始し、避難所や仮設住宅、借り上げ住宅の訪問活動を展開。介護予防を目指した活動も行う。

御礼 日本対がん協会賞・朝日がん大賞に多くの方々の推薦をいただき、誠にありがとうございました。それぞれの分野で数々の実績を挙げられている方々ばかりで、選考委員会では様々な意見が交わされ、難しい選考となりました。今後も、がん対策に大きく貢献された個人・団体を讃える賞として充実を図り、がん征圧に向けた道標となるべく尽力して参りたいと存じます。多くの方々のご支援をお願いいたします。 日本対がん協会

「『がん教育』を考える」

神戸市で教職員らと意見交換



8月19日、第11回KOBE教育フォーラムが神戸市長田区の市立地域人材センターで開かれた。このフォーラム

は、同市の特色ある教育の成果を発表し、教職員、保護者、市民が交流する場として2004年から市教育委員会などが主催している。文部科学省のがん教育モデル事業実施道府県・指定都市21カ所のひとつでもある。

がん教育に関する分科会には、市内小中高の養護教諭、保健体育の教員や教育委員会関係者を中心に60名以上が参加。日本対がん協会の小西マネージャーが「『がん教育』を考える」と題し、がんの知識やがん教育の背景などについて説明した。

文部科学省は、がんの基本的な知識といのちの大切さや生き方への理解を深めることを目的としている。しかし限られた授業時間の中で網羅するのは難しい。日本対がん協会がこれまでに実施してきたがん教育の写真を織り交ぜながら、「堅苦しくがん教育を行うとどうしても難しくなってしまう。どのように伝えれば子供たちにわかりやすいか、私たちも模索中だ。今日は私たちもみなさんに教えていただきたい。」と呼びかけた。

現場の負担をどう軽減するかが課題

後半1時間は、神戸大学医学部附属病院腫瘍センターの腫瘍・血液内科特命准教授である向原徹氏に加わってもらい、会場全体でディスカッションする時間を設けた。向原氏は昨年、奈良県の大淀高校で行ったがん教育「ドクタービジット」(主催：日本対がん協会、朝日新聞社)で講師を務めた。

向原氏は「がんは、患者のその後の人生に大きく影響する。仕事や趣味、家族との関係など。近年、患者のサポート体制などが医療は格段に改善された。しかし、どんなに病院内の体制が整っても、社会で受け入れられないことには始まらない。子どもの頃からがんの話題を聞いておくと、20～30年後に社会は変わる」と、がん教育の意義を唱えた。一方で、ドクタービジットで高校生を相手に授業したとき、どのくらい理解してもらえたのか感触がつかめず、伝える難しさを感じたことを打ち明けた。

中学校の校長は、「昨今、教師に指導を委ねられる科目が大幅に増えている。教員たちも十分に学ぶことができない状況。教える立場としては、教師が専門的な知識を踏まえたうえで伝えなければ、子どもたちにも伝わらないのではという恐れがある。今日は貴重な機会。今後も積極的にこのような場

をつくってほしい」と話した。他の教員からも「自分自身知らなかったことがたくさんあり、今日の講義が勉強になった」という声が上がった。

また、がん死亡率が減少している外国ではがん教育がどのように行われているのか、がん教育DVD「がんちゃんの冒険」(制作：日本対がん協会)の特色など、先進事例にも細かに質問が及んだ。また、具体的な指導要領を決めてほしいと国に求める意見も出た。

最後に向原氏は「学校

の先生方がどんな不安を抱えているのかがわかった。教育、医療それぞれの場面で連携し、患者を支える社会をつくりたい」と話した。



参加者から出た主な意見

- ・がん体験者と医療関係者それぞれが行うがん教育では、どのような違いがあるのかもっと知りたい。
- ・教員たち自身ががんに関する知識はおろか学ぶ機会が不足している状況で、教える立場として不安がある。このような学べる場を積極的につってほしい。
- ・子宮頸がん検診やワクチンについて触れづらい。
- ・誰がどの学年に教えるのか、文科省に決めてほしい。また、原則的な教材をつくってほしい。
- ・どのようにがん教育を進めればいいのか、自分の中でまだ答えは出ていない。しかし、学校現場の負担を理解して、どうすれば自分たちがやりやすいか配慮して下さりありがたい。

おっぱいはあなただけのものじゃない

ピンクリボンムービーサプライ第2弾「おっぱい愛」監督 西村麻里さん



乳がん検診をすすめるマンモ

ピンクリボンムービーサプライ第2弾「おっぱい愛」が8月1日からリリースされた。ムービーサプライはピンクリボンフェスティバルの一環として、若手実力派クリエイター3人を起用して、乳がん検診受診を促す60~90秒のショートムービーを制作する企画。今回は初のアニメーション作品で、ピンクのマンモスのマンモが検診に行こうとしない人魚たちを叱るという内容。監督の(株)I&SBBDOプランナーの西村麻里さんにお話を伺った。

——なぜアニメーションにしようと考えたのですか。

理由は2つあります。1つはとにかく言いたいことが沢山あったからです。でも、病院で流したり、がんにかかった人が見ても傷つかないようにしたりということを考えたとき、ストレートに訴えても見た人を傷つけないのは実写ではなくアニメかなと。もう1つは今までの乳がんの啓発には、怖がらせる訴求が多いと感じていました。マンモグラフィ検査にしても痛いという印象が定着してしまっている。それを払しょくするためにも、ゆるキャラじゃないですが、面白いイラストでキャラを立てて訴求しようと思いました。

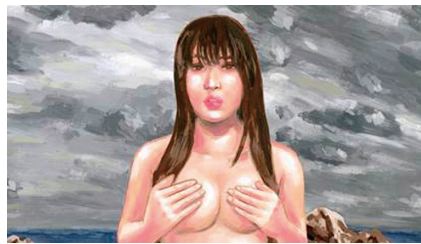
——マンモというキャラクターを考えたいきっかけは何ですか。

マンモスを出そうという事は、ダジャレのような感じですぐ思いつきました。ただ、キャラクター設定にはこだわりました。この作品をつくるために社内外の女性たちにずいぶんヒアリングをしたのですが、がん検診に行くには、誰かにガツンと背中を押してもらいたいと思ってる人が多いんです。松岡修造さんみたいな人に熱く叱られた

いと。そこでマンモの声はハスキーな特徴のある声で、インパクトはあるけどきつすぎず、どこかユーモラスなスマイリー原島さんに頼みました。足音とパオーンという鳴き声は、スピルバーグなども依頼するハリウッドの音響効果会社から取り寄せました。

——人魚の方は。

こちらは最後に出てきたアイデアです。もともと実写だと胸を出しにくいというのもアニメにした理由の一つですが、胸を出しても不自然じゃない設定を考えて、そうだ、人魚にしちゃえと。マンモもちろんですが、この人魚たちのイラストも独特の個性があって訴求力が強い、そんなイラストが欲しかったので、イラストレーターは最初からいつもチームを組んでいる中島彩さんに頼もうと決めていました。



——人魚とマンモのやり取りにリアリティがありました。

とにかく一人啓蒙活動かというぐらい、しつこく検診を勧めたり、ヒアリングを沢山したのですが、みんな本当に怖がっているんです。「マンモは痛いから嫌」とか、「がんが見つかったら怖い」とか、「見つかったら助からないんでしょ」とか。知識がないのでやみくもに怖がっているんです。中には「がんが見つかるくらいなら死んだ方がまし」、なんて言う人までいて、もう「ふざけんな！」ってマンモに成り代わって怒っていました。

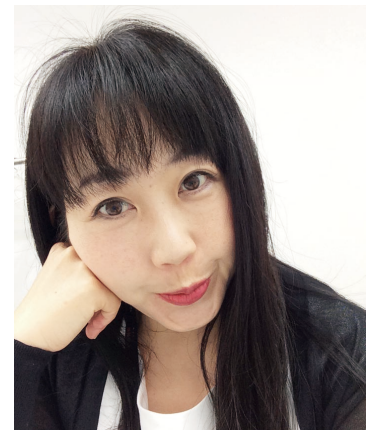
——「オっぱいは女の宝物だよな。でもどう考えても持ち主の命の方が大事だろ？オっぱい切ってもみんなムネはって生きてるんだよ！」というマンモのセリフが強烈です。

実は以前から乳がんとはご縁がありました。というのも私、福岡でがん患

者さんにおしゃれなウィッグを差しあげるNPOを立ち上げたことがあったんです。その活動の中で、おっぱいを失ったことで生きる気力まで失ってしまった乳がん患者さんのことを知って、そんなバカなことはない、おっぱいを失ってもあなたの価値は変わらないんだよって、誰かがきちんと言ってあげなくちゃいけないんじゃないかってずっと思っていたんです。このセリフを言わせるのは勇気がいりましたが、乳がんで実際に胸を切った友人知人にヒアリングをしたところ、「自分もそこを言いたい」という人が大半だったので思い切って言わせました。

——マンモがLINEのスタンプになるそうですね。

はい。9月にLINEのスタンプが完成して、一応今回のキャンペーンが完結します。マンモは検診の重要性を伝えるキャラクターとして浸透させたいと思い、LINE以外にもツイッターを活用したり、ポスターを作ったりと、ムービーのリリースの一月ぐらい前から種まきを始めました。色々なメディアを使って拡散させよう考えるのは、広告会社で仕事をする私にとっては普通のことなんです。今回検診を勧めた人たちの中で異常が見つかった人もいて、改めてがん検診の大切さを認識しました。これからも私なりに検診の重要性を伝えて行きたいと思います。



西村麻里(にしむらまり)
武蔵野美術大学造形学科卒業
博報堂C&Dなどを経てI&SBBDO入社
現在コピーライター・CDとして勤務。

Topics

九州・沖縄県支部
ブロック会議

検診担う支部との連携深めたい

長崎みなとまつり最中の7月25日、長崎市内のホテルで今年度の九州・沖縄県支部ブロック会議が開かれた。全国6ブロックの皮切りで、私もBS朝日から着任して1か月だったが、支部の皆さんのがん検診にける熱意がひしひしと感じられた。

会議の中心は支部から出された16件の議題協議。熊本県支部が今年度新しく造る胃・胸部併用車両について他支部に助言を求めると、床は段差を減らしたり、滑りやすいスリッパをやめて絨毯にしたりした方がいいという受診者にやさしい意見が出た。

市町村との協力体制では、佐賀県支部が2011年度から、受付から医師まで女性スタッフだけで検診する「レディースデー」を年数回設けて好評を得ていることや、地元の看護学生を取り込む動きが興味深かった。

会議を通じて女性の発言やアイデアも目立った。鹿児島県支部では3部署合計で25人近い看護師と管理栄養士を、新設した健康増進部にまとめることで、市町村との連絡や支部の業務を

集中管理できるようになった。

会議の後、懇親会も行われ、多くの方と意見交換した。改めて本部の役割と日本対がん協会は何をしていくのかを考えている。

ご存知のように協会の活動の3本柱は検診の推進、患者・家族支援、啓発だが、第一の看板である検診の推進については、本部が直接実施していないことや、対象が全国に広がっていることからつい支部任せになりがち。無料クーポンの提供や設備投資の助成、協会報の発行や各種の研修などにとどまっている。

一方で、ピンクリボンやリレー・フォー・ライフはやるのがはっきりしていたり、協賛金や寄付金、集まる人数といったものさしもわかりやすかったりするため、本部として注力しやすい。

しかし、「全国で年間1100万人のが



ん検診をしている」という協会最大のPR文句は支部の検診あつてのこと。今後、支部との連携を一段と進め、ニーズに応じていきたい。厚労省などの最新情報の提供もより早くお届けしたい。先日1回の採血で13種類のがんが判定できる検査技術の開発に国が着手した、というニュースが流れた。技術開発をはじめ時代とともに検診のやり方、ひいては支部の経営も変わっていかざるを得ない。その時々で力になれるような本部に近づけていきたい。

(日本対がん協会常務理事 塚本章人)

レシートで寄付先を決めるユニークな取り組み ハローデイグループへ感謝状を贈呈



感謝状を受け取るハローデイ執行役員 管理部部長の徳留基雅様(左)と伊藤・日本対がん協会事務局長

日本対がん協会はこのほどユニークな寄付活動に取り組んでいるスーパー、ハローデイグループ(北九州市・加敬道社長)に感謝状を贈った。同グ

ループは福岡県内を中心に山口、熊本3県合わせて49店舗を展開している地域密着型のスーパー。様々な社会貢献活動に取り組んでいることで知られる。なかでもユニークなのが「お客様のお気持ちをお届けする1000万円の寄付活動」だ。これは、同社が毎年1000万円を寄付金として用意し、その寄付先としてあげた複数の公益活動を行う団体の中から、顧客が寄付したい団体を選び、買い物レシートを投票箱に入れて支持率を計るというもの。寄付金額は投票されたレシートの重さに応じて比例配分される。

同社が寄付先としてあげた団体は当初は6団体だったが、年々増えて昨年度は12団体となった。寄付額の算定

方法も始めはレシートの金額を集計していたが、あまりに増えて時間がかかるため、重さを測って決める方法に変更した。昨年度は1000万円の中から、60万円が台風10号で被害を受けたフィリピンへの災害義援金として贈られたので全体の寄付は940万円だった。その中から対がん協会は97万円いただいた。対がん協会への寄付は2010年度からで、ピンクリボン運動支援のための「ほほえみ基金」への寄付や、子宮頸がん支援のための「子宮頸がん基金」への寄付と年ごとに使い道のテーマを決めている。2013年度分までの寄付金総額は約370万円に上る。2014年度からはがん征圧運動全体への支援に広げた。

9月5日 リレー・フォー・ライフ・ジャパン2014 福岡プレイベント開催

本イベントは9月13、14日 ぜひご参加ください。

9月5日に、福岡市中央区の天神中央公園でリレー・フォー・ライフ・ジャパン2014福岡プレイベントが開催される。このイベントは9月13、14日に海の中道海浜公園・光と風の広場で開催される本イベントのプレイベントで、5日に同市で開催される「がん征圧全国大会」に合わせて、福岡市民や全国の支部の皆さんにもリレー・フォー・ライフ(RFL)を知ってもらおうと企画された。会場は全国大会が行われるアクロス福岡の隣とアクセスも抜群。この機会にぜひRFLを体験してほしい。

リレー・フォー・ライフ・ジャパン2014福岡プレイベント

9月5日(金)14時～20時

【会場】福岡市中央区・天神中央公園

リレー・フォー・ライフ・ジャパン2014福岡

9月13日(土)、14日(日) 開幕午前11時(24時間開催)

【会場】海の中道海浜公園・光と風の広場



地元アイドルLinQも応援

リレー・フォー・ライフとは?

リレー・フォー・ライフは「がんを負けない社会」を実現するために、がん患者(サバイバー)や家族、その支援者を応援するための募金活動を行うチャリティイベントです。1985年にアメリカで始まり、日本では2006年に茨城県つくば市でのプレ開催からスタ

ートしました。がんと闘う方々の勇気をたたえ、がん患者や家族、友人、支援者と共に交代でフィールドを歩き続けることにより、地域一丸となってがんと闘う連帯感を育みます。なお、収益金は日本対がん協会に寄付され、がん患者支援活動に役立てられます。

今年の本イベントとプレイベントの両方なので例年以上に準備は大変ですが、開催本番に向けて頑張っています。プレイベントはコンパクトながら、RFLの主要要素を盛り込むほか、地元福岡のアイドルグループや、定評ある市役所の吹奏楽団の演奏など楽しいイベントも盛りだくさんです。まだRFLを体験したことのない方たちも、この機会にぜひ参加してみてください。



RFLJ福岡実行委員長 中村伸一



サバイバーズスタート



がん啓発キャラクター ふっぴー



ルミノリエセレモニー